

紹介

能樂源流考

能勢朝次著

本文一千五百頁を超えるこの大冊に收める所は此の分野の研究に令名既に高い著者の十年研鑽の結實であり、著者自ら序に云はれる如く内容の過半は既發表のものではあるが今こゝに體系的に整理されたのを見ればまた新なる魅力と價值とを持つ事が感じられ、その研究方法上の不滿はさる事乍ら眞摯なる研究態度には自らの頭の下るものがあり、洵に力著の名にふさはしいものである。

内容は卷末附篇「田樂效」を除いて大別二分し得るであらう。即ち觀阿彌世阿彌による猿樂能の一應の完成以前に關する「猿樂能源流考」ともいふべき部分(第一篇及び第二篇)とそれ以後慶長年間までの猿樂能が徳川時代武家式樂としての能樂へと進展しつゝ、あつた時代に關するものである。第一篇を「平安時代の猿樂」と題し貴族間及び賤民間に行はれに兩様の猿樂を考へ、國史記録日記物語等の中いやくも散樂、猿樂、さるがう、亂舞等の記載あるものはこゝに集め、それ等よりして當時の所謂猿樂の藝態を考察するが、史料の批判並に解釋は概して穩當と思はれ(但し五六頁に所引の三代實錄記事の「新伎散樂」と古事類苑に見ゆるを誤植と斷

言される著者の意見には、新訂増補國史大系本による時は到底承服出來ない)殊に當時の賤民猿樂には中心藝たる滑稽解頤の物質似劇的演技の外に歌舞の要素が加はり猿樂能發生の萌芽の見られる事を説く事は注目し得よう。咒師考に於ては修正月會修二月會の法咒師と關係づけて猿樂咒師の發生及びその藝態を考へ、翁猿樂考に於ては、「法華五部九卷書」の記載を中心として翁舞三番が咒師藝の三手結合せるものに宗教的意味づけの行はれたものと結論して後世の翁の神聖視の原因の考察に一の光明を與へ、白面の翁は稻積翁であるよりは代繼翁であるにふさはしいとして花傳書の説を疑ひ、現在の型に至るまでの翁の様式變化の迹を考へ、此等の考察は何れも多分に想像の部分を含むもの乍ら現在の資料を以てなし得る考察の極限に近いものを示し、全卷中最も光彩に富む部分となつてゐる。第二篇「鎌倉吉野朝時代の猿樂」に於ては大和及び丹波の猿樂諸座の生育過程を見(前者に關聯しての薪猿樂の考察は従ふべきものと思はれる)、猿樂に於ける能即ち藝能の展開を田樂能延年能との發生の前後の問題を吟味しつゝ、延年風流、延年連事、狂言風流を想定の資料として、觀阿彌世阿彌以前即ち鎌倉末期に既に猿樂能が高度の發達を上げてゐた筈との結論に到達する。これを是認する時は觀世父子の猿樂能様式創造の功績が從來過大に評價された事を認めねばならぬが、またかゝる状態にあつたればこそ龍右衛門、赤鶴の作と傳へる中のあるものゝ如き優れた古作面が鎌倉末期に制作され得たとも言ひ得よう。最後に吉田高野兩博士の伎樂末流説を批判し、之を非として前篇と稱

すべき部分を終る。

第三篇「室町時代の猿樂」に於ては大和猿樂四座及び宇治、近江丹波、伊勢、攝津の諸座の室町時代を通じての活動を文獻史料上より跡づけ、又勅進猿樂、手猿樂を考へ、更に猿樂と寺祇、武家並に宮廷との交渉を言ふが、その爲に一見史料集の觀を呈するまでに豊富に集められた文獻は大部分猿樂界以外の立場より記された一般の文書記録等より拔萃されたもので、それ等を批判解釋する事により却つて猿樂者間の傳書の記事を訂正するの態度がとられ、推論の過程も概して綿密穩當であり信ずるに足るものが多い。但し「四季祝言」卷末の元能の朱書に對する解釋は今少し素直な讀解が可能なのではあるまいか。又室町時代猿樂史の記述として當然含むべき大和猿樂對他猿樂の關係、大和四座相互間の關係、殊に世阿彌の藝風が香阿彌、禪竹の何れに多く繼承されたか、また現在各流の藝風の差の由來の當時にまで遡り得るか否かの問題等が明瞭にされて居らぬ憾がある。これは餘りに詳細な事實の記述に互り過ぎたために却つて大局の記述が不明瞭になつたとも云ひ得るが又本篇の内容が文獻的方法による歴史的事實の考證に限られて藝術史的及び藝論史的考察に缺けてゐる事にも甚く。能樂史といふ人間の藝術活動の一分野の歴史が藝術性或は藝術精神と遊離して考察される時それは所詮生命のない歴史的事實の形骸の羅列に終るは當然であり、空間性のみならず時間性にも規定せられて一回的に消え去り面、衣裳、詞章等を止める外は過去の演能を直接觀照する事の出來ぬこの藝術を對象とする歴史の記述が現在の演能

様式及び遺品と無關係に年代記的に行はれて、それが果して能樂源流の解明であり得るであらうか。政治史的な時代區分に機械的に従つて江戸幕府創設の時を以て記述を打切り室町時代猿樂四座の江戸時代武家式樂としての能樂五流となるまでの道程さへ含みせぬこの敘述が果して當を得たものであらうか。

併し乍ら世阿彌の藝道論に打たれ實際の演能を研究的に見、主として藝論的な立場でその幽玄味を探り藝能論を味はひ中世藝道の一系列の中に於てこれを理解しようとし乍らその基礎工作としての能樂發達史の方面に主力を注ぎ、又藝論史の方面の造詣も決して少しとせぬこの著者にこの態度の見られる事は方法上の不備に無關心であつたのではなく敘述の便宜上故意に文獻學的方法のみに限られたものと推察され、而してその方法によつて現今なし得る考究の極限に近いものがここに展示された事は、とかく印象批評的な思ひつきによつて災され勝ちな能樂研究者に對する一服の清涼劑であり、進んで藝術史的研究所をなさんと志すもののためには絶好の資料集を提供されたのであると言はねばならぬ。この意味に於て本篇末尾二百頁に互る演能曲目統計及び謡曲作者考は卷末の索引と相まつて最も利用され易い部分であらうが、この作者考は謡曲作者についての所傳の批判的紹介であるに止りこの方法のみで作者を決定する事の無謀である事はいふまでもない。附篇「田樂考」も亦傾聽に價する。(菊判一五五頁、昭和十三年十一月、東京岩波書店發行、定價拾貳圓)(鳥道雄)